2017年10月1日（日）岩手日報　28面

大型コンテナ活躍に期待

公道で走行実験　ILC活用も見据え

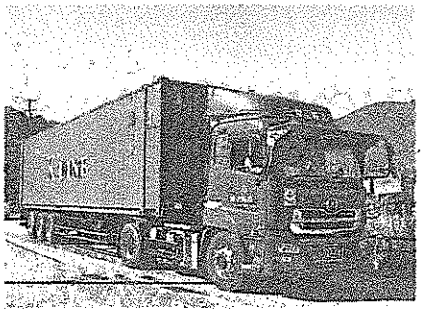
大船渡

大船渡市と大船渡港物流強化促進協議会（会長・戸田公明市長）は9月29日、通常よりも大型の45フィート海上コンテナを運搬する車両の公道走行実証実験を行った。

45フィートコンテナは長さ約13・7メートルで、国内で主流の40フィートコンテナよりも1・5メートル長く、積載容量の向上や長尺貨物の運搬が可能となる。本県の北上山地（北上高地）が建設候補地となっている国際リニアコライダー（ILC）の資材搬入港としての活用も見据え、内陸部と結ぶ道路状況を調査した。

実験は同市赤崎町の大船渡港湾永浜山口地区を起点に国道107号・397号ルート（総走行距離155キロ）と国道343号ルート（同41キロ）で実施。運転者からは「通常よりコンテナが長いので交差点でのカーブが難しい」「トンネルのすれ違いに注意が必要」などの声が上がった。

走行状況はビデオで記録し、運転者からの聞き取りも含めて通行支障箇所を具体的に把握する。西山春仁（しゅんじ）都市整備部長は「東日本大震災の復興需要後を見据えると内陸部への時間短縮と走行性の向上が港湾活用に重要。ILCで利用された場合の検討にも役立てたい」とし、国・県への道路整備要望に生かす考えを示した。



45フィート海上コンテナを積載し走行実験する車両